南部の雪に逢うて

木もからん宿かせ雪の靜さよ　惟然

（木もわらん、として聞ゆ。校訂者誌す）

二本松にて

先づ米の多い所で花の春

松しまにて

松しまや月あれ星も鳥も飛ぶ

深川の千句に

おもふさま遊ぶに梅は散らばちれ

など一句として斧鑿にわたりたりとは見えず。地獄天道は學ぶ人の心なるべし。

○南部の鴉も黑く日向の鷺も白し。師錬は入宋せず、さは有りながら、子長があやしきは天下歷覽の功なりといへり。風遊は心の趣處なるべし。

下京をめぐりて炬燵行脚哉　丈草

名護屋にて

世を旅に代かく小田の行戻り　芭蕉

○詩をうたうて善惡のわかるゝごとく、俳諧も調子なるべし。句中言外のひゞき、格外の中をしれるものゆかし。

寒ければ寢られず寢ねば猶寒し　支考

紅葉には誰が敎へける酒の煖　其角

門人の吟中此類多し。俳諧の袴着つめたるものゝ全く及ぶところにあらず。

○上手のしたる漢も、和ほどにはいひとられざるにや、

洛花今織錦山石

わさりと鴈の歸るふるさと　季吟

今織錦に洛花勿論にて、武陵花、崎陽花としても又しかるべし、歸る鴈は故郷ならばわさりといふ字も衍ず。

都をば霞とともに出でしかど

秋風ぞふく白川の關

錦江春色逐人來　巫峽清秋萬壑哀

老杜が手なれども、能因には及ばずと聞きし。

○いつのころにかありけん、ミノ斜嶺亭にして

もらぬほどけふは時雨よ草の屋根　斜嶺

火をうつ音に冬のほたる火　如行

（冬の鶯、として聞ゆ。校訂者誌す）

一年の仕事は麥にをさまりて　芭蕉

まことや此第三を、十餘句ほどせられて後、座がしめりたりとて、此句に決せられたりと其連衆のかたるを聞きぬ。賈島は推敲の二字になやみ、圓位上人は風になびくの五文字につかれ給ふとぞ、難波の西鶴が一日二萬句の主になりたりとて、人もゆるさゞる二萬翁とほこりたる、これもとより風雅の瞽者なれだ力なし。

笙ふく人留主とは薫る蓮かな　西鶴

白粉をぬらずしておのづから風流なるこそ、由來風雅の根基なるに、此句風流を得たがりて風雅なし。留主とはかをる、めづらしき薫りにこそとはの二字、おのが得し俗たぶらかしにて、生得の風趣なり。これらを發句なりと、一生を夢裏にたどれるはあさまし。渠れは此の筋の野人にして論ずるにたらずといへども、久しく初心の爲に塵名を曳きて、風俗を害し、あまつさへ晩年には好色の書を作りて、活計の謀としたる罪人、志あるものたれかかれをにくまざらん。

各文通の句

青簾いづれの御所の賀茂詣　其角

浮れ出て山かへするかほとゝぎす　去來

あやめ見よ物やむ人の眉の上　嵐雪

とへば爰野中の里やほとゝぎす　風國

夕だちにこまりて來ぬか火とり虫　正秀

傍過ぎてあまりにおもふ水鷄哉　土芳

東武吟行

かるゝと荷も撫子の大井川　惟然

追悼

鶯はいなせて竹に蟬ばかり　風士
山中や鶯老いて小六ぶし　支考
編笠の願見やるまつりかな　朱拙

偶作

世の中はたゞ山雀の輪ぬけなり　同
雉の鳴く拍子に散るかけしのはな　筑前　素薩

諸方の句十八樓の記あり略之

芭蕉老人の遺稿ども、よのつね好士の許より贈られたるは、洛の風國泊船集に出したれば、再び茲に贅せず、伊陽は翁の熟地なれば、若くば土芳、猿雖のがり鴻書して丐うたるに、こゝにあうちかしこにとられて、大むね烏有となりたりとぞ、此歌仙を贈らるゝによつて、爰に加へて追加とす。

戌七月廿八日猿雖亭

夜席

あれ〳〵てするゑは海行く野分哉　猿雖
鶴のかしらをあぐる粟の穂　芭蕉
朝月夜駕に漸く追ひついて　配力
茶の煙りたつ暖簾の皺　望翠
かつたりと枵をくだす雜水取　土芳
窮屈さうにはかま着るなり　卓袋
燭臺の小さき家にかゞやきて　翁
名主と地下と立分る判　雖
燒めしのわりても中のつめたくて　翠
おもひくづさず出でぬくらがり　芳
此ごろは扇の要仕ならひし　袋
湖水のおもて月を見はらす　苔蘇
脇指の小尻の露をぬぐふ也　力
相撲にまけて言ふ事もなし　雖
山陰は山伏村のひとかまへ　翁
くづれかゝりて軒の蜂の巣　袋
燒さして柴取りに行く庭の花　芳
土かきさがす春の風すぢ　翁
坪割の川除の石つみあげて　翠

日なた〳〵に虱とり合ふ　蘇
大名の供の長さのはてもなき　力
むかひのかゝのおこる血の道　雖
一升の代を持て來ぬ酒の粕　翁
盥のそこのあられかたまる　翠
燈の革屋細工の夜は更けて　芳
鼬の聲のたなもとの先　力
箒木はまかぬにはえて茂る也　翁
干帷子のしめる三日月　雖
神主は御供を持つてあがらるゝ　望
しばらく岸に休む筏士　袋
衣着て旅する心しづかなり　翁
加太へ這入る關の別れど　芳
耳髓をそがるゝ樣に横しぶき　雖
行義のわるき倩六尺　翠
大ぶりな蛸引きあぐる花の陰　力
米の調子のたるむきさらぎ　蘇

ばせを庵にて

寒菊や小糖のかゝる臼の傍　芭蕉
提げて賣行くはした大根　野坡
夏冬は取置く橋を懸初めて　同
門に貌出す月のたそがれ　蕉
雲行も烽の日癖のざんざ降り　同
此一谷は粟の御年貢　坡
七十に成るをよろこぶ助扶持　蕉
三尺通り裏のさし掛　坡
涼しさは堅田の出崎よく見えて　焦
蛭取る牛の方耙休むる　坡
黒染に寺の男のこゝろ入れ　翁
其日に戻る旅の草臥れ　坡
押詰まる師走の口を喰ひかねて　翁
緒に緒をつけて咄す主筋　坡
田の中に堀らせぬ石の年經りし　翁
芝に道つく月おぼろなる　坡

花の時祖父は目出度くなられけり　翁
俵で米かす春の藏もと　坡
廣庭に青の馬染を引きちらし　同
這ひ廻る子のよごす居どころ　翁
裏合せ根鞭のくゞる藪の岸　坡
蝮のあとをいたむ霜さき　翁
とし寄つて身は足輕の追ひからし　坡
泣いて酒のむ乘物のまへ　翁
とう〳〵と榎に風の當る音　坡
稻盗人の繩を解きやる　翁
月見れば親に不足の出來心　坡
こぼれて露は何所へ行くやら　翁
假に剃るあたまばかりは殊勝にて　坡
仕付けてもどす聟方の客　翁
田を植うる向ひ近江の稻の出來　同
天氣に成りし宵のかみなり　坡

右俳諧歌仙者翁在世(元祿六癸酉冬)於芭蕉庵興行也(炭俵集前二卷)先師不適意句多、故不滿韻終止畢。然今人絞肝膽耽詞花不及師妙術也。尤於當時風流者語意可增減處覺候畢。雖久藏頭陀袋門人梨里依數奇深切附與之、聊無違亂者也、

享保戊戌孟春　樗野坡

其袋序

なにくれとして天の袋あり。あらゆる是が入物なり。人におふくろといふ母の稱也。筆とらず物見ずとて、父におはれて、おそろしきこらし袋のからきめみしも、いつにわすれて底なし袋口もむすばず、そなりすだれにたる空言袋、清輔の名立つるにはあらず。我れぞつきありきぬ。士に番袋有り、職に火袋有り、くびにかけたる袋には、いかなるものを入れたるぞ、詩の袋、春山暮月李賀がふくろにおもし歌の袋、光廣のひきずり袋、それもおもかりけん爲憲が袋をかぶらんとすれば、息くゞもりてむづかし。其袋や、花のしぼみたる、月のかけたる、かつ〳〵拾ひえて、括りて我家の秘藏袋とす、蘭にもきせず猫もかぶらず。元祿三年かのえ午みな月吉辰蘭雪自序

其袋春之部

改正

おれにいはしや先づ御代をこそ千々の春　季吟

都ちかき所にとしをとりて

薦を着て誰人います花の春　芭蕉

月花のかます作らん餅むしろ　擧白

餅の上にけふしちぎりぬかゞみ草　山夕

元日や晴れてすゞめの物がたり　嵐雪

人日

うかれきて薺はやせや神樂打　舟竹

一年のこゝろ拍子はなづなかな　無倫

陸月はじめのめをといさかひを、人々に笑はれ侍りて

よろこぶを見よや初音の玉はゝ木　嵐雪

若菜

若菜摘む跡は木を割るはたけ哉　越人

莖だちや五條あたりは妾もの　百里

つちくれに花の咲きたつ菜屑哉　冬文

野にいでゝ小鍋やほしき鶯菜　東流

鶯

鶯や手ならひの窓おもしろき　十一才調武子

うぐひすの宿とこそ見れ小摺鉢　嵐雪

梅壺や鶯毎に御消息　山川

鶯の音やつゝまるゝ雪の綿　桐雨

梅

鰯燒く隣にくしやまどのうめ　秀和

梅の花沉や麝香はもたねども　才麿

梅さきて編笠やよき煤び頃　仙化

築垣の梅にうれしき崩れ哉　かしく

梅が香はいかに工むぞ庭作り　沾荷

霞

破れ鐘をまぎらかしたる霞哉　子英

浦々の家に帆かくる霞哉　風洗

雲跡を埋むといふ事を

我宿もよそより見れば霞哉　月下

夕霞暮れておぼろと申しけり　鼠彈

柳

ゆく水のやまずながるゝ柳かな　山川

柳の芽毛のはえたるも美しゝ　冰花

詠むるに目のくたびれぬ柳哉　月下

春水滿四澤

こほり解けて鯲泡吹く澤邊哉　素行

春水春風一時來

氷消えて風におくれそ水車　その

接

見たいもの花もみぢより繼穂哉　嵐雪

哀れさや接の花の咲きおくれ　衞門

涅槃會

天人も泣貌わろしねはん像　釋己百

燕　愛宕にて

かはらけも下行く雲のつばめ哉　桐雨

舟綱にゆらゝる沖のつばめ哉　巴山

燕休岸

土車引手も休むつばめかな　舟竹

花　上野にて

花の雪しつかい伏見常盤哉　立志

女中方尼前は花の先達か　嵐雪

花もじやよそへ出るにも玉くしげ　才麿

友猿のとしえらびすな花衣　其角

待つ花にをり〳〵うごく缸かな　調柳

清水にて

めくら石いたくも花に行きあたれ　青女

花の跡なれや鴉はいつもなく　鋤立

花にめさば竹馬にても參るべし　しもし

花にまた都を二ッ見初めけり　沾蓬

花に來て袷はおりの盛り哉　曉雲

膳所にて

花や波軒の下まで鴉の海　桐雨
退けば雨よれば花踏む木陰哉　好柳
はなちらばまて懺悔せん罪一ッ　風子

都ちかく遊びて

花の雪大津雪踏にそべりけり　月下

鳥追はんために鳴子付けたるを

花鳥やちらば鳴子の獨りぼし　菊峯
菅笠や男若弱たる花の山　百里

思夜櫻

夜あらしや大閣樣の櫻狩　その
下戸めらやかくれ所の山さくら　孤屋
藥ばかりちりのこりても櫻哉　沾荷

あふみにて

雲櫻あふみのふじや見かみ山　桐雨
汲みかへる小鰷おもたきさくら哉　〃
とく散りて見る人歸せ山櫻　一有

むさし野に人行きあたる櫻哉　立吟
我がかげのさくらにのぼる夕日哉

輪門樣薨御をおそれいたみ奉りて

物いはず心になかん山ざくら　不角

櫻川はほそくながれて、青柳のさと一

かまへうちかすめり

膝木よる長女いやしやいと櫻　嵐雪
人のものを是程をしき櫻哉　專跡

帋　鳶

夕ぐれのものうき雲や鳳巾　才麿
蚊足が隣りかへたりけるに申し遣しける

此夕べ軒端隔ちぬいかのぼり　嵐雪
いかのぼり雨のあしみる霞かな　〃

漁　邨

蜑の子や竹に付けたるいかのぼり　風洗

游　絲

かげろふにさし矢の沉む野中哉　山川
いとゆふにうごくや去年の古薄　亂絲
糸ゆふや口を明けたる糀むろ　冰花

病　中

つくづくと糸游や氣のむすぼゝれ　才麿
糸ゆふや左へめぐる酒の間　鋤立
陽炎の跡をおさへし小猫かな　舟雪
かげろふにうき沈み行く帆かけ哉　湖舟
糸游やけぶりてかわく屋根の上　立志
陽炎の晝は爐中の寒さ哉　達暑

若鮎　附白魚　鮠

若銀口魚は鵜の一觜に足らぬ也　才麿
しふうるか持つとも見えぬ小鮎哉　濁子
白魚も孕すがたぞ淺ましき　東雲
春の水に秋の木の葉を柳鮠　嵐雪

雉

一聲も三聲もなかぬ雉子哉　衞門
美しき顏かく雉子の距かな　其角
一しほの聲さぞあらん南部雉　嵐雪

海　苔

ゆく水や何にとゞまる海苔の味　其角
海老喰うて海苔の味しる蜆子哉　左衽
和田の海所さだめぬ海雲哉　菊鈴
しほ染めて心もかろし海雲賣　笠凸

寒　食

寒食や揚屋より火を燒初むる　舉白
寒食やその日にあたる佛達　立吟
胸も火も寒食の日に腹立てぞ　冰花
寒食や旅人の雪の跡きえず　月下
寒食は霞一重のこぶしかな　言龜
寒食やいはけなき子にすねらるゝ　琴風

鞦　韆

鞦韆のたはぶれはやせ猿廻し　〃

青精飯

桐柳民濃やかに菜飯かな　嵐雪

猫　戀

猫の戀鼠もとらずあはれ也　琴風
老猫の尾もなし戀の立姿　百里
から猫の三毛にもかはる契り哉　枳風
猫の五器あはびの貝や片思ひ　秀和

猫ぬすまれて

猫の妻いかなる君のうばひ行く　嵐雪妻

雲　雀

杉の木を定規にのぼる雲雀哉　冰花
黒きものひとつは空の雲雀哉　李由（アフミ）
羽にうけて幾重の雲に鳴く雲雀　渭橋

上　己

綿とりてねびまさりけり雛の貌　其角
誰が國も彌生の海の道千筋　露沾
隣り〳〵雛見廻はるゝ小家かな　嵐雪
嬉しいなけふは物いへはだか雛　專跡

動かぬを物おもひなりけふのひな　霜白

犬あり。一條の院の御翫びに習ひて、犬丸と名付く。まことや清少納言の、おもひいためるけふをしのびて

犬丸にかつらせさせよ桃の宴　〃

山崎の槌買うてこよ雛遊び　同

妻におくれて悲しみの内、娘の雛を愛して

夫婦雛娘のとはゞいかゞせん　達暑
眉ふりて虫喰ふ雛の惡女かな　一口
雛の座を追出されたる弟哉　東雲

四　日

朝寢して櫻にとまれ四日の雛　曉雲
彌生にも中よき鷄の遊び哉　笠下

辛　夷

ゆふぐれの鳥にくもるこぶし哉　梅車

蝶

蝶かろし頃はきるもの一ッ哉　湖春
鴟尾やはかなき蝶の鼠色　嵐蘭

上野より歸り侍るとて

酒くさき人にからまる小てふ哉　嵐雪
沖の蝶汐さすまでをねぶり哉　才麿

苗　代

なはしろにいそがぬ水のすがた哉　子英
迷ふらんなはしろ頃の田の鼠　冰花
うらゝさや田の中けぶる溜り水　一有（イセ）

耕牛無宿食　倉鼠有餘糧

たがやすも鼠のためか牛つかひ　笠凸
うごくとも見えで畑打つ男かな　去來

蛙

玄賓のこゝろしらずや鳴く蛙　野水

淺草の觀音堂にて

聞きわけん蛙に交る鶯の聲　冰花

三十三間にて

俳諧七部集拾遺其袋

乞食にも物くれて聞く蛙哉　富士大宮六花

二階にて蛙きく夜のまろ寢哉　渭橋
蜂呑みて己となやむかはづ哉　和賤

蝦蟆溫とかやいへるもの久しくやみて顏は蟾のやうにたゞたれにはれなやみぬれば、此度のえらびにもれ侍らんと、本意なく覺え侍りて、病中の苦しさを漸うに申し侍る

くるしさは鏡にむかふかはづかな　銀鉤

春　雨

春雨やかぞふるばかりしづ心　紅雪

歸　雁

何事を田螺にいひて歸る雁　子英
歸るかり富士の裾田の砂ふるへ　長雅

藤

風なくてしづか過ぎたり藤の花　杉風（釋）
とても世を藤に染めたし墨衣　宗派

山藤やまき上げらるゝつむじ風　月下
藤がえやいばらなければむづかしき　風瀑

小奴吉齋に花をみせて

小坊主よ足なげかけん松に藤　嵐雪

春草

いろ〳〵の草鞋いで見るやけ野哉　紅雪
木瓜茹旅して見たく野は成りぬ　山店
おもたげに松の葉かつぐ筆かな　夜章
女郎花くねらぬさきよさいた妻　舟竹
烏芋堀男たすきよあら〳〵し　杜英
たんぼゝの物いみの日ぞ佛の座　衞門

椿見にまかりけるにちりければ

もぎどうにとてもちるなら椿哉　柳玉

觀水

物ゆるし魚の兒見る春の水　沾德

野游　少人あまたさそひ侍りて

一筆や矢立におふるつくゞし　沾荷

三月盡

連嵐が筆の歩みや春のくれ　立吟
行く春やをしさうにつく鐘の聲　山川

袋の底を拂ひ侍れば、猶句どもあるを拾ひかさねて、數の外の部をみだりに並べ侍る

神祇　うす井權現にて

稲妻にけしからぬ神子が目ざしやな　嵐雪
迂宮や西行よりは五百年　立吟
豐國や鳥の巣を守る古つゞみ　樗雲
舍殿の梅清淨し神の靈

八句　科戸の風の吹き放つことのごとく

見るうちの罪もとまらぬ競馬哉　孤屋
菖垣葉も神勅を聞け　嵐雪
犬人に八尋の門を守らせて　同
屋根に鉦矢打つ珍重の聲　屋
なます盛る三角柏の大鼎　同
荒振る鼠鞦に和メン雪　雪
置座に文ひろげたる初月夜　同
稲も子を持つ天の益人　屋

齋宮繪馬

繪馬かけて明日の年見ん稲の神　もし

住吉奉納千句卷軸

ふるかれや神樂拍子にかぐら聲　路通
霜朝の禰宜のしはぶき神さびぬ　百里

社頭時鳥

手を打ちて神靈覺しめ子規　涼葉
をがむ間に蛙飛出る小祠かな　景道
燒鎌の敏鎌も穗家の助け哉　月下
一道は麥蒔殘すいなりかな　山川
宮人の顏見て歸るかれ野哉　斧鉞

爲虛在靈

竹の子をぬけば音あり神慮　舟竹

雪の下の旅籠る宿は、若宮の社人なりければ

鎌とくら萩負ひかへる社人かな　桐雨
芳野へ行く人にことづてして
祝子も花の名申せ神の場　もし

荏柄天神奉納

こぼれ梅かたじけなさのなみだ哉　嵐雪

釋教　附哀傷

ちりかゝる花より撰らん六の塵　東旺
六十萬人決定往生
胝やあはれ遊行のたび衣　冰花
我等今日聞佛音敎歡喜踊躍と、讀誦し
たてまつりて
嬉しいか念佛をどりの柄杓ふり　嵐雪
受持佛語作禮而已

もらひ來る實ばえ嬉しや法の花　山川
　塵點本のこゝろを
うどの香やさしも芥の中ながら　同
（摩訶止觀）
　一目之羅不能得鳥得鳥之羅唯是一目。
　此文のこゝろを
鳥雲に餌さし獨りの行衛哉　其角
座禪堂つら〳〵椿咲きにけり　雷笠
　ふか草にて
鮨作りつみ深草よ石ほとけ　月下
　讀維摩
蝶とまる芥子は維摩の座敷哉　翠紅
けしの實の大きく見ゆる座禪哉　鋤立
　應無所住而生己心
鶴の巢や行きもとまるも水のまゝ　〃
　木食の蕎麥喰けるに
新蕎麥の新の字に着く心かな　百里
孟蘭盆やふだらく走り老の波　桐雨
　如薪盡火滅
身の後や灰汁にもならぬ秋の暮　素行
寒念佛弟子に傳ふる法はなし　草加水山
　殺生戒
いかほどの虫の命をわた作り　〃
　邪婬戒
狐よぶ妻猫にくしやのらごゝろ　〃
　偷盜戒
ひろはじなぬしなき風も椎のから
　妄語戒
なりはひのからき世をしれ夷講
　飲酒戒
竹の葉のみだれやすしや雪の暮
　曉覩佛
醉覺めぬ腹も立ちやむ胸の月　百里
　夕聞經
唐音の施餓鬼身にしむ夕べ哉
　夜尋僧
稲妻の紙燭消えけり影法師
　三句　追善
うたてやな櫻をみれば咲きにけり　鬼貫
月のおぼろは物たらぬ色　才麿
酒盛の跡も春なる夕べにて　來山
　母を夢みて
蓮の實をふくむに夢の乳房哉　風洗
　讀九相詩
櫛紅粉や寺の湯殿は蔦もみぢ　年弓
　十歳に成りける童の身まかりけるに
駒とりのもとの雫や末の露　嵐雪
　戀
藤やたゞ君にふれたるむすぼゝれ　その
約束は清水にてのやなぎ哉　百花
　思ふ人を待ちあかして、あかつきかた
いささか寢入りたるに、からすのいと
　ちかく鳴くに見あげたれば、晝になり
　たるいとあさまし
みじか夜や烏のこうと待ちぼうけ　山川
　逢恨戀
我が戀や口もすはれぬ青鬼灯　嵐雪
子規おほよそ鳥と夜るつれよ　菊鈴
舌去りて鴛鴦に愛あり戀の友　不障
戀草の罪懺悔せよふかみぐさ　紅雪
　後朝
はやかなしよし原いでゝ麥畠　水花
　あらぬ事にかこつけても、わすれがた
　さよ
柚の釜のせめても戀し姫くるみ　笠扇
山ふかみそれにうき名よ姫くるみ　その
うき人を又くどきみん秋の暮　去來
こひ死なば契りたがへじ蔓珠沙花　寸木

若衆を待つ

献立に鴨とかく筆物ぞおもふ　百里
君が手よ末つむ花のいたいけさ　巴洗

四　睡

海棠に女郎と猫とかぶろ哉　卜宅
戀せずば双六しらじ秋の暮　不障
腮摺やたがひにつらきひゞとひげ　琴風

もろこしまでもゆくもの者、あきのね

ざめのこゝろなり

秋の夜や定めぬ妻の物案じ　山川
昔今の戀に手傳ふ葱哉　同
戀衣紙子似合ひしよし野哉　鋤立
ながき夜を我れは戀して覺えけり　同
よすがなき戀にしねとや神無月　杜格
我戀は餓もくはれぬ命かな　嵐夕
岡見すと妹つくろひぬこへの門　嵐雪

述懷

萬句興行に

肩衣は戻子にてゆるせ老の夏　杉風
捨人やあたゝかさうに冬野行く　其角
炭やきも黑まぬ老いの白髮哉　渭橋
百年の後なき人や冬の蠅　蕭山
此伽羅におもひ出しけり古紙子　普船
年の市とぼしき業や白述賣（おけらうり）　もし

慰女房

三盃子ことたらはずや年の暮　嵐雪

撩嵐雪

年のくれかねさぐらせて歸りけり　月下

遊冰花

年の市蕎麥うたぬこそ本意なけれ　同

其袋夏之部

更衣

名聞をはなれずもあり更衣　露沾
帶ふるしいまだ旅なる衣がへ　一有

ころもがへかたびらきたる女かな　鋤立
ほころびもあやなきものよ袷縫　三翁
老も來てつまさかりたるあはせ哉　舟竹
帶ふときかとり乙女やころも更　卜宅
衣かへまだ傾城のそよ寒し　月下
初風やをかし袷のかたひづみ　當歌

青簾

五位六位色こきませよ青すだれ　嵐雪
けふ更に青きはなきか簾賣　月下
空燒にすゝけやそめん青すだれ　紅葉
水の日の稻妻見せて青簾　才治

江上新樹

柴船の漕ぎこそのこせ夏木立　才麿
一葉づゝ蜘蛛のゐになる若葉哉　沾荷

鴎鳩

銃や稽古の跡のかんこどり　冰花
我れ須磨の關守ならんかんこどり　調柳
植捨つる山田は青しかんこどり　舟竹
畫貌にはけ〳〵しさよかんこどり　稻花
かんこどり煙草荒れつゞく島かな　楸下

鰹

小聲にはよばれぬ物か鰹うり　風吟

庖丁がうしはいかに解きけん

窮屈に鰹をたゝむあるじ哉　百里

子規

ほとゝぎす新茶より濃き聲の色　才麿
時鳥何を古井の水のいろ　露沾

待乳山の社頭に雨を凌ぎて

空は墨に畫龍覗きぬほとゝぎす　嵐雪
淀舟や喧嘩にまじる杜宇　立志
夏痩は夜を寢ぬゆゑぞ子規　秀和
杜鵑まだ隣りではほつ音かな　梅川（ミノ）

島原にて

君たちの日かさにぬれよ子規　桐雨

主將之法務擧英雄之心

歌人には歌よませけりほとゝぎす　卜宅
松に休む雁がねいづち蜀魂　立霞
新まくらものいふしほや杜宇　冰花
二四八は誰が魂の數ほとゝぎす　衞門
淀舟の鯉とる鷹かほとゝぎす　翠紅
ほとゝぎす鐘撞くかたへ鳴音哉　湖水

をさないに灸すうるとて

いたくなけなかば聞かうぞ杜鵑　夕口
吃りてはほとゝぎすとも申されず　百里
ほとゝぎす待つにぞ見ける夏暦　杜英

灌佛

見る事の新茶にすゝぐまよひ哉　青女
灌佛やはや入相の大佛　百里
灌佛や餓鬼に增賀の衣とらせ　〃

短夜

庵の夜もみじかく成りぬ少しづゝ　嵐雪

蟬

あなかなし鳶にとらるゝ蟬の聲　嵐雪
手にとりてふり出されしせみの聲　當歌
かいすくみ鳴かねば見えぬ小蟬哉　不一

蚊到明

蚊の聲のしらむに寂し軒の雨　沾德
魚の骨火鉢にくさき蚊やり哉　風洗

うちなげく事侍りて

あはれとより外には見えぬ蚊遣哉　嵐雪
鐵のうしにとりつく藪蚊かな　孤屋
蚊の聲もまだ力なし衣ひとへ　兆風
蜑の子の蚊をよび歩く川邊哉　大柳
蚊やり火に娶いでゝ行く軒端哉　笑種
寢はれたる顏いたいけや枕がや　青女

なきものゝ蚊帳ふるひて

化し夜の蚊にむせかへる涙かな　桐雨

城外吟

朝々の蚊に髣髴（さもにたり）市の聲　友五
寢ぬ夜更蚊屋に入りたる鼠哉　富士大宮白盆

螢

草もなくこがるゝ石のほたる哉　渭橋
ほたる火や晝の暑さの息遣ひ　月下
奪あうてふみころしたる螢哉　己百

漁父

蓑干して朝々ふるふ螢かな　嵐雲

腐草螢となる

枯草の又もえ出づるほたる哉　卜宅
はやき瀨を何としづかに飛ぶ螢　立志
飛ぶまゝのこゝろを幣にほたる哉　冬蟬

杜若

咲く中に紫ばかりかきつばた　來山
里沼のくさゝ忘れつかきつばた　一泉（カヾ）
しのゝめをよびかへせとや杜若　一德

鵜　附川獵

かゞり火に見ゆや鵜匠の貌ばかり　琴風
鵜づかひは夢にも鵜をやつかふ覽　冰花
かつぎ上げ星のむ闇の鵜川哉　湖舟
樫鮠（かはやなぎこり）よぶかたへながれけり　舟竹

照射

弓杖に歌よみ顏のともし哉　嵐雪

端午

蘭の香にあふや湯殿の古へちま　立志
傘ばかり菖きのこしたる菖かな　青女
左右左に横雲渡るのぼり哉　百里
人立やかゞしをすぐに菖蒲　湖水
銅の樋に色ますあやめ哉　笠下

伏見草とて世にもてなさるゝ御秣よ

蔣草（まこも）めせ淀のゝ草も持ちてさう　〃

印地

おもふ人にあたれ印地のそら礫　嵐雪
なでしこの嵐は印地かはら哉　立志

競馬

毛の色や馬の競べに見さだめず　冰花
人の世もかう暮しけり競べ馬　山川

瓜

水飯にかはかぬ瓜のしづく哉　其角
初瓜と妹にいはせん親ひとり　巴風

五月雨　附五月闇

さみだれの最中や鐘の濁りやう　立吟
さみだれや浮木にすがる蛆のかず　冰花
たれこめて蠅うつのみぞ五月雨　渭橋
さみだれや晝鷄の聲くらし　調柳
五月雨に壁落ちのこす葎哉　山川
書見れば身の垢かゆし五月雨　卜千
五月闇桃の虫をもたうべけり　楸下

溽暑

妻も有り子もある家の暑さかな　冰花
日の晝は水のまけたる暑さ哉　京信德

寢ぐるしう枕をかへすあつさ哉　細石
水無月や朝日夕日もうるし搔　雪江
夏の日に懶き飴のもやし哉　嵐雪
水無月や暑さを探る猫の鼻　富士大宮銀雨

納涼

しばしとて石あたゝむるすゞみ哉　立志
魚折り〳〵光りすゞしや水の色　夕口
玉川にうぶめきゝ出す涼みかな　紅雪
（枕双子）とくさといふものは、風にふかれたらん音こそ、いかならんとおもひやられてをかし
友ずれに木賊すゞしや風の音　山川

誓願寺にて

四條へのぬけ道すゞし梅の風　尙白
帷子のせなかふくるゝすゞみ哉　衞門
豚なでゝすゞむをかしや屋敷守　笠凸

浴

湯をかけて涼しく成りぬ壁の草　立志
ねぶたげのつくまで涼む庵哉　調柳
垣越のはなししみけり夕すゞみ　龜翁
犬に逃げ犬を追ふ夜のすゞみかな　嵐雪

角田川を下りに

音曲は一重ばおりの歸帆かな　其水

清水　附心太

かたびらは淺黄着て行く清水哉　尙白
あはや清水おもひもよらぬ後より　舟竹
長嘯のしみづにひやせこゝろぶと

水の車のしづくをうけて

すゞしさや心てへとる水の色　嵐雪

扇　附團扇

みちのくの三絃きけばあふぎ哉　鋤立
繪もなくて心あやなし素扇　一詞
さる人の紋見付けたるあふぎ哉　尙白
小夜更けて肌のつめたきあふぎ哉　衞門
かつぎより男見るまのうちは哉　立吟

蠅

うつくしき繼子の顔の蠅うたん　紅雪

拔劍逐蠅

蠅はぢき怒る心よ手束ゆみ　嵐雪

祇園會

屋根洗ふものどさめきや祇園の會　百里
七日鉾に乘る人のきほひも都哉　其角
十四日山は行き松はしらずや祇園の會　紀州一三

雲の峯

雲の峯空に心のもやつきぬ　桐雨

佃島にて

雲のみねうねり上せよ土用波　百里

夕立

ゆふだちに呼びいださるゝ拍かな　その
夕だちや坂行く駕籠の御簾　山川
夕立のまたやいづくに下駄はかん　鬼貫

夕立に追はれて來るむら鳥　隨友
ゆふ立や池のすがたのあたらしき　衞門
むさし野にて
夕だちやうしの下腹我がやどり　甲府梅庚
蓮
はづかしや蓮に見られて居る心　湖春
白鷺不禁塵土涴
白鷺やにごれる池のはちす陰　菊离
素堂の蓮見にまかりて
田畠の辛苦もなきはちす哉　己百
麻
櫻麻さくら夕べもおもひ出づ　桐雨
いかにして紡錘によるらん櫻麻　杜格
物得たり麻刈る跡のあさぢ酒　月下
蝸牛
かたつぶり石に落ちたる音ぞうき　冰花
妍かたち女の鬼かかたつぶり　百里
かたつぶりてりからさるゝ青葉哉　月下
夏衣
帷子の重ね着は何のたすけぞや　冰花
ばせをのわかれに
夏衣妹笠ぬうてまゐらせよ　尙白
夏草
やまぶきの實に成る頃のいちご哉　虚洞
怠らで咲いて上りしあふひ哉　才麿
やさしさや龍卷きのこす花あやめ　尾花澤清風
厩守る其の草をかれ馬齒莧　笠扇
善光寺にてみる喰ふ尼に
みる房やかゝれとてしも寺の尼　嵐雪
晝貌の花や昨日の今時分　鋤立
夕顔よふくべの名さへなつかしき　もし
道づれの女見かくす麥野哉　素親
さかさまに撫子すがる高根哉　爲睦
光廣もしろしめせばぞ蓼摺木　年弓

一房を手にあまりたる牡丹哉　湖水
咲くときの牡丹にせまし園の色　遠水
東叡山の若葉の下に、畫寢亭をかまへ
侍りて
雪見草花のふる夜は寢覺しか　絲絲
池上にて
山水の濁り散らさじ香蕎散　舟竹
男をんな打ちまじりてすゞみ歩みて
夏瘦を戀する人と見らればや　風子
その白き鹽に染めしか茄子漬　魚兒
若竹の一まつ高し月の隈　苦翠
聲たてぬおもひよ鹿の袋角　もし
足音の間をたゝく水鷄哉　李下
水札鳴いて日影ちろつく流れ哉　一泉
富士を見て身をもだえけり羽拔鳥　菊匂
みな月になきもの見せんふじの雪　涼葉
しらすがの宿をとほりたれば、中鰺と
よばひ賣りけり。此魚うりのその中を
とりけるもをかしくて、其うをゝ呼び
て見たれば、げにも大小の中にはんべ
るをさかなにして
よの中をしらすかしこし小鰺賣　其角
夏は又冬がましじやといはれけり　鬼貫
妻驪詣
行程二里餘の旅すがた、ことゞゝしう
足袋はゞきして、卯の花月夜明けやら
ぬほどに出でぬ
首途
荆の花裾きらしなり旅ごろも　嵐雪
日本橋石に御本丸見ゆる、東叡山は後
に雲かゝりて見えず、雨のふたつみつ
顏に落ちくるを、きづかはしきに先達
の坊いへるは、かさはなうて常にある
ことぞとて、旅行猶しづかなり

雨雲やはら〳〵あふぎ旅の笠　當歌

神明にて夜明けぬ

鶏のこしやむ聲か夏木立　同

増上寺をがむに、まことや此の塔に風雲のかゝるを、一尺ばふとかやいふ。

けふは空晴れて雲なし

よき馬に乗りあたりけり青嵐　青女

東海寺の慈雲庵へ先づ尋ね行きて萬年石を見る

萬代やとくさのしげり石の苔　同

瑞聖寺

わくらばに土くさきなりうしろ堂　當歌

めぐろの瀧も人のまうでぬ日

底清水心の塵ぞしづみつく　嵐雪

句の序よくて、くだんの袋の底の旅の句をならぶ。

桐雨のぬし京うち參りとていでぬ。行くかたの覺束なく、しる人はそこ〳〵に、道のほどはかう〳〵といひふくめ出したてつ、卯の花の雪消え、五月雨のくもらぬほどに歸り來べきなれど、いと名殘をしくて

梅にさむる朝げわするな辛き物　嵐雪

駕籠かきの、旦那々々といふに聞きあき侍りて

馬士に貧きはなし雪のやど　其角

馬はみん闇のつゝじのうつの山　子英

海川に錢なをしみぞ花の波　鋤立

木の形りよ樗ににくき馬士が顔　調柳

春三月團子ぬくらんうつの山　路通

秋の空富士を色々に撩(なぶ)りけり　卜尺

月の照りいづくにふじの影法師　氷花

富士の煙り雪やむかしの消殘り　松(サノ)子

によつぱりと秋の空なるふじの山　鬼貫

雪の日は物見の松もよられけり　秀和

池鯉鮒なるみ畫も淋しき砧哉　風瀑

首途

よく咲いて人に見られよ宿の菊　巴風

草枕ものゝ問ひたき案山子哉　舟竹

木の葉かきて礎見せよ不破の關　李下

辻堂や寒さもしらぬ樂あみだ　笠凸

春雨や粟津が原に二ところ　伴(ナニハ)自

短夜の聲なま長し馬やらう　衞門

くさまくら飯にものこる暑さ哉　青女

旅人の足跡かぎる清水かな　仙化

大かたの秋のわかれやすゝのもり　百里

瀨戸染飯

寒食の里侘しらに染飯かな　桐雨

宇津谷の十團子

その露を柳にかけよ十團子　同

草津姥が餅

姫が餅姥はさくらの名なりけり　同

大和見にまかでさぶらふとて「つばくらにしばしあづかるやどり哉。といへるに、我れも猫にわかれをしみて

契り置くつばめとあそべ庭の猫　園女(イセ)

宮川のわたりまだ夜ふかう

色あひもわづかに春の夜明哉　同

明野

咲かぬまも物にまぎれぬ菫かな　同

同じ野中より駕籠にかきのせられて

手を延べて折りゆく春の草木哉　同

伊奈木川

手ぐり船風は柳にふかせけり　同

伊賀越

山松の間々やはなの雲　同

駒とりの聲ころびけり岩の上　同

花の前に顔はづかしや旅衣　同

朝ふかくやどりたつとて

ねぶたがる人にな見えぞ朝櫻　園女

同じ曙

おもしろや水の春とはひたの音　同

なつみを行過ぎて

まねくやと跡になつみの川柳　同

卯月朔日當麻にまうでゝ、まんだらを

をがみ侍りて

衣更みづから織らぬつみふかし　同

おなじ日香久山にまかりて

あら美し卯の花は誰が衣更　同

さる澤にて

水若葉かつぎ着て來し人のかげ　同

そでかけてをらさじ鹿のふくろ角　同

法隆寺

二王にもよりそふ蔦のしげり哉　同

北國何とやらいふ崎にとまりて、所の

夷もおし入りて句をのぞみけるに

文月や六日も常の夜には似ず　ばせを

その夜北の海原にむかひて

あら海や佐渡に横たふ天の川　同

名月は敦賀に在りて

名月や北國日和さだめなき　同

氣比の宮へは遊行上人の白砂を敷きける。古例ありて、このごろもさる事ありしといへば

月清し遊行のもてる砂のうへ　同

淺水のはしを渡る時、俗あさうつといふ。清少納言の橋はとある、一條あさむつのとかける所也

あさむつや月見の旅の明けはなれ　同

瀨田にて

我が駒の沓あらためん橋の雪　湖春

其袋秋の部

初秋

今朝よりは編笠はるゝ一葉哉　幽山

初秋の風のよわさやいとすゝき　三翁

盆前は大あらましや秋の風　帆雪

七夕

浮草のうかれありくや女七夕　才麿

星合やいかに痩地の瓜つくり　其角

ほし合に我妹かさん待女郎　嵐雪

桐

落ちかゝる桐の葉かろしひとへ物　山川

葬

朝貌に置くとは露のつよみ哉　大阪　來山

朝がほに二度泣くけさの別れかな　秀和

あさがほや片庇なる玄關前　百里

朝がほは繪に寫す間にしをれけり　破笠

褌着て朝貌に其の恥はなし　杜格

朝顔や誰れが文にもうらみられ　月下

魂祭

たま棚や露も泪もあぶら哉　嵐雪

魂まつり味なき山のこのみかな　湖水

たまだなは面白をかしきにほひ哉　百里

盆の十五日ぞ、さかな物せよといます母のことぶき給ふもいと有りがたきに

このうをゝ親に上げたやたま祭り　冰花

魂まつる宿や入相つねならず　甲府調柳

施餓鬼棚我影ぼしも哀れ也　一映

盂蘭盆や生けるをつなぐ雀賣　渭橋

月　附駒迎

北殿よ月にとふべき渡世なし　沾德

江の月やふかみ淺みの蜊から　鋤立

名月や歌人に髭のなきがごと　嵐雪

二所に月見る人のとがいかに　舉白

舷をきざまん月の落所　衞門
菅笠やことに目に立つ駒迎へ　秀風

菊　花　九唱

其一　九日

菊もまたつゆ〳〵つぼむ九日哉　嵐雪

其二（素堂亭にて、人々十日のきく見られけるに）

かくれ家やよめ菜の中に交る菊　同

其三（百菊を描へけるに）

黄菊白菊其の外の名はなくも哉　同

其五（菖のたけの、みやびやかなる、歌のすがたなりけらし。きくをみて句をまうく）

鶴の聲菊七尺のながめかな　同

其六（琴）

琴は語る菊はうなづく籬かな　同

其七（棊）

菊買ふは又棊にまけし人ならん　同

其八（書）

書を抽る芭蕉にねぶれ菊の兒　同

其九（畫）

菊さけり蝶來て遊べ繪の具皿　同

鹿

ねらはれて道なき鹿の眞向哉　不障

田　家

鹿よりや哀れ鹿追ふ翁聲　桐雨

己巳九月十三夜游園中十三唱

其一　素堂

ことしや中秋の月は心よからず。この夕べは雲きりのさはりもなく、遠き山もうしろの園に動き出づるやうにて、

さきの月のうらみもはれぬ

富士筑波二夜の月をひとよ哉　同

其二（寄菊）

たのしさや二夜の月に菊そへて　同

其三（寄茶）

江を汲みて唐茶に月の湧く夜哉　同

其四

旨すぎぬこゝろや月の十三夜　同

其五（寄蕎麥）

月に蕎麥を占ふこと、ふるき文に見えたり。我がそばはうらなふによしなし

月九分あれのゝ蕎麥よ花一ッ　同

其六

畠中に霜を待つ瓜あり。試みに筆をたてゝ

冬瓜におもふ事かく月見哉　同

其七

同隱相求といふ心を

むくの木のむく鳥ならし月と我れ　同

其八（寄薄）

蘇鐵にはやどらぬ月の薄哉　同

其九（寄蘿）

遠くとも月に這ひかゝれ野邊の蘿　同

松にあはぬも時ならんかし

其十

一水一月千水千月といふ古ごとにすがりて、我が身ひとつの月を問ふ

袖につまに露分衣月幾ッ　同

其十一（答）

月ひとつ柳ちり殘る木の間より　同

其十二（寄芭蕉翁）

去年の今宵は、彼の庵に月をもてあそびて、こしの人ありつくしの僧あり。あるじもさらしなの月より歸りて、木曾の痩もまだなほらぬになど詠じけらし。ことしも又月のためとて菴を出でぬ。松しまきさがたをはじめ、さるべき月の所々をつくして、隱のおもひ出にせんと成るべし

此のたびは月に肥えてや歸りなん　同

其十三

園より歸る

われをつれて我影歸る月夜哉　同

碪

衣卷や粘すりをけの音淋し　菊鈴
砧打つ人も裸でうまれけり　鋤立
蘆の屋の灯ゆりこむきぬた哉　立志
槌音を隣りはづかし破れきぬ　山川
有りつべきものは砧の小歌かな　冰花
我馬に拍子しらするきぬた哉　巴風
鼓やら砧やらたゞあめの音　仙化

野分

小はら女や野分にむかふかゝへ帶　その
湯けぶりの土を這ひ行くのわき哉　東眺
手にたらぬちり〳〵草の暴風哉　立志
いそがしや野分の跡のよばひ星　一笑

紅葉　附蘿

小男にかたじけなしや下もみち　秀和
水底の紅葉見て來るかつき哉　八木
片枝は霧こめ〳〵のもみぢ哉　百花

嵯峨の歸りに

おもたさに紅葉はなげつ二月橋　遠水
蘿の手にやがてにぎれる小石哉　嵐惠

薄

はづれ〳〵粟にも似ざる薄哉　その
蘭の香としらで風見る薄哉　大阪　伴自

伊勢の國に修行しける頃、關の地藏とかやにとまりたるに、宿に橘のさかりなりければ、宗長法師

橘の香にせゝられて寢ぬよかな

これらも猶俳諧のまくらにはあらずかし、豐國野を過ぎける頃

角もじやいせの野飼の花薄　其角

おなじくいせの國出づるとて

はまぐりの二見へわかれ行く秋ぞ　芭蕉

虫

秋の部に入りてなかばや裸むし　琴風
かまきりや蘆火にうごく灰の中　舟竹
はたおりよ何を業に鳴きはせで　山川
露明けぬ蜻蛉とまる水のうへ　冰花
繼しきはひつぢにそだついなご哉　紅雪
穭田にあかく成りたるいなごかな　風子

稻すり歌の聞きふるびたるは、そなた百迄とぞうたふ

百年に一疋たらぬいなごかな　衞門
日ぐらしの聲ぞなみだの親の里　少年　彌五郎

一日二日餘所いきして、宿心つきて、親里のかたを詠めていへりけらし

夕照

俳諧七部集拾遺其袋

蜻蛉の壁をかゝふる西日かな　沾荷
潮落ちかゝる蘆の穗のうへ　芭蕉
霧の外の鐘を隔つる松こみて　露沾
沓にはさまる石原の露　荷
入る月の薄粧うたる武者ひとり　蕉
柴の篁をあやどる　沾
山寺は晝も狐のさまかへて　荷
花とひ來やと酒造るらし　蕉
夕霞日々に重なる鞠の音　沾
白き胡蝶の垣を飛越す　荷
絹はりを欄の柱にすぢかひて　蕉
みだれし髮をなほすかんざし　沾
調べなき形見の鼓音もいでず　荷
何も燒火に皆盡しけり　蕉
棒の月一つの窓に僧やせて　沾
澁つき染めしうらの藪かげ　荷
みゝづくの己が砧や鳴きぬらん　蕉

四十雀こそ風も身にしめ　嵐雪

稲妻

古すだれ稲妻とまる綻(ほつ)れかな　立吟
いなづまは稲に契りの間(ひま)あるか　鋤立
稲妻の笹に音ある狐かな　伴叔

相撲

すまひとり傾城の名にまぎれけり　冰花
兄弟も勝つことおもふすまひ哉　花蝶
投げられて禮して這入るすまふ哉　立吟

病後

すまふとる心になりぬ秋のくれ　尚白

踊　祇園にて

舞子更けて踊る烏の聲白し　京千之
稲妻にをどり崩れて泣く子哉　月下

案山子

かゞしみて乘馬きるゝ徑(こみち)かな　調柳
まじ〳〵と日に照さるゝかゞし哉　原水
見渡せば出來不出來あるかゞし哉　呂洞
みのむしは千種の花のかゞし哉　鋤立

秋暮

癖に成りて淋しや秋の今時分　京千春
立ちいでゝうしろ歩みや秋のくれ　嵐雪
秋のくれ女房のほくろ見付けけり　冰花
いきて居る人見て秋のあはれかな　鋤立
七夕の獨りあそびやあきのくれ　鼠尾
秋のくれくつ〳〵をかし羅漢堂　月下

九月十日菊のかへりとて、集のふくろからげて立ちよられけるに

秋のくれ井手の蛙のからをみん　舟竹

といひて土産ねだられけるに、人丸の柿の實、山邊の栗のから、今日の得もの丶あまりなりと、笑ひ興じて

榧のからよしの丶山の木のみ見よ　嵐雪

蕎麥　讀甲陽軍鑑

あらそばの信濃の武士はまぶし哉　京去來
茴香

實のおぼろ葉の朝露やくれのおも　桐雨

閑(敦忠のかれの樋ほ、今もうち付におもひ出でられ侍る)

我が宿は何を忍ぶのすり火うち　卜宅
ありの實よ人の問ひこば山の奥　水山(艸加)
梨ばかり夕日に醉はぬ山路哉　臥葛

山家に遊ぶ事侍りしに

いざともに糧ぐさきらん秋の庵　湖水

猶さまよひて

里の子と鼻たらし居る木わた哉　同
蕎麥はたく男にもろし女郎花　東雲

貧郎

手繰(たぐ)縄(なは)のくるしや賤が芋のから　百里

けふも俳諧明日も月次とて

四隣りをかぞへ歩くや庭たゝき　百花
落鮎の水にあかるゝうき世哉　勇招
川音につれて鳴出すかじか哉　團友
鳴網は風の足見るゆふべかな　湖舟
そよぐたびとりならひけり相撲草　三翁

其袋冬の部

老しらぬ今朝しもなどか桐火桶　露言

讃大黒

神の留守よい女房を守るべし　嵐雪
おもげなるとのゐ袋やかみな月　山川
淺ましやまだ十月の暦うり　來山

時雨

島松はわざ〳〵ぬるゝ時雨哉　立志
草履とりしかり〳〵ぞゆく時雨　葉水
茶を煎りて時雨あまたに聞きなさん　嵐雪

京へまかりて

時雨ふり黒木になるは何々ぞ　才麿

桑名には笘干す宮のしぐれ哉　山川

江口にて

からかさのえぐちにかさぬ時雨哉　京　千之

爐

爐の友や額にかけたる翁面　月下

いつとなく我座定まる炬燵哉　孚先

中よしやごとくの足の冬籠り　衞門

埋火やきゝ耳たつる鼠弾　百里

小野といふ名にめされけり炭俵　和賤

足袋

足袋はきて寢る夜隔てそ女房共　嵐雪

革足袋やあらたなる程りちぎなる　鼠尾

木枯

こがらしに吹倒されし座頭哉　蹊木

一すぢに風や世のこゝろばせ　一有

こがらしに腹立つ鴉のひかり哉　桐雨

木枯に咎おほせたる木の名哉　土鮮

日あたりもこゝろに寒き枯野哉　湖風

うたうてもまうても冬の山路哉　原水

十月雁

こがらしの高くもなるか雁の聲　百里

十月の風いろ〳〵にきく夜哉　言瀧

落葉

藪川の水に落葉の色ぞなき　三翁

枳に落葉つらぬく山路哉　東石

落葉朽葉皆拾はるゝ銀杏哉　北鯤

炭屑にいやしからざる木の葉哉　其角

落■て風もすくなき木葉哉　釋吟水

落葉たゞ色々の木の煙り哉　宗波

狼の吠えからしたか冬の山　冰花

支離馬すてしかれのゝ哀れかな　風洗

塚一ッ枯殘りたる野中哉　和賤

たうとしやいためぬ梨の冬木立　山川

歸花

物すごやあらおもしろの歸り花　鬼貫

松風ぞうしろに山よかへり花　舟竹

やどり木の衍よ若しかへり花　樗雲

深草の櫻は白しかへり花　秀和

雪

初雪や皆やごとなき沓の跡　山川

門の雪臼とたらひのすがた哉　嵐雪

常々はしらぬ榎よけさの雪　調柳

だゞくさに木立もれたる雪の形　衞門

旦夕も過ぎるか雪のたまる音　孤屋

白雪は溝の端のも喰はれけり　月下

つめたさを雪にまぎれて歩きけり　湖水

一嵐鐘の音落せ竹の雪　兆風

初雪の白きにこりぬ目やみ哉　峽水

初雪も別にあまみはなかりけり　止行

霜踐至堅氷

初雪は鹿の角にもたまれかし　紅雪

色ごとに香こそ有りけれ柚子の雪　宇門

病中

はつ雪の半蔀ゆるせ風の神　竹井

霰

あられには思ひ忘れよはちかつぎ　舉白

霜

霜の夜や蟻の音きく古柱　風子

日の朝や待ちて霜田の堀餡　達曙

とし毎の初茄子は、駿州江尻の庄より奉る

霜枯に一花咲けるなすび哉　呂洞

凍

田にそひて益なきほどを氷哉　沾德

五器一ッ氷の上のあはれかな　伊丹　青人

風歸す氷は水のいかりかな　立吟

玉章に薄墨がちのこほり哉　作者不知

水の隈いろ〳〵なれやはつ氷　花蝶

古池の波たつるなよ薄氷　衛門
溜り江も凍ては白し水の花　一口
はり〳〵と氷のり越す小船哉　衛門

海鼠

むくつけき海鼠ぞうごく朝渚　露沾
海鼠喰ふはきたないものかお僧達　嵐雪

蠣を得て返事に

給はるは石花にかしこしひねり文　同

鰒

河豚ほど鰒によう似た物はなし　鬼貫
米にかへたる鯛にはあらで
舟君のさうしや落つる雪の鰒　山川
今更につられて鳴くか鰒の聲　冰花

半醉半醒辭

祐成鰒を喰ふ時は　曲水

ときむねはくはざりけり

鰉鰒のひろはれに行くあられ哉　立吟

鮟鱇やめなみ男波の水ふくれ　菊匂

衛

鳴門なる渦にまかれそ浦ちどり　冰花
雪のちどり寒うて鳴くか嬉しいか　桐雨
息つけよ足高山に飛ぶちどり　菊匂
はら〳〵や風の吹きゝる村ちどり　幽亭

水鳥

水鳥のあゆみ短かき山田かな　湖風
たはぶれや呑みあふ鴛の水鏡　山川
鴛の來て物潜かなる小池哉　尚白
麥を蒔く人には多し赤がしら　秀泉

水月

晴過ぎて物皆黑し冬の月　樗雲
つれもなく野に捨てられし冬の月　露尺

鷹附追鳥

覗かれてものうき鷹の夜居哉　子英
珍しき鷹わたらぬか對馬船　其角

魚賣を蹴て行く鷹やみさご腹　桐雨
追鳥の一羽逃行く入日かな　一峯

夜興

ほめられて夜行の犬のきほひ哉　冰花

葱

ひともじや一字の題のわすれ草　百花

臘八

猿は飢ゑ牛は胡麻喰ふ霜夜かな　紅雪
冬の日客をもてなす
君見よや我手いるゝぞ莖の桶　嵐雪

煤掃

武藏野や煤はきなれど富士の山　東順
すゝはきは暖かなるを家例かな　調柳
すゝ竹の世々を戸ざゝぬ町家哉　菊峯
煤はきて何やらたらず家の內　月下

鉢扣

身をすてよ下駄はく雨の鉢たゝき　冰花
はちたゝき君子の閨を遠ざけよ　衛門

節季候

せきぞろやまづ天王寺御墓山　しもし

衣配

衣くばり四町へ色をわかちけり　同

歳暮

年の急ぎちひさき足袋ぞ心せく　月下
米虫の石臼めぐる歳暮かな　楸下
古暦ほしき人には參らせん　嵐雪

世話

二月十七日神路山を出づるとて

德

はだかにはまだ衣更着のあらし哉　芭蕉
龍樹菩薩の禪陀伽王に對して、貪欲を
しめし給ふに、たとへば有瘡人近猛煙
始雖悅後增苦の文のこゝろを

欲

雁瘡のいゆる時得し御法哉　其角
逍遙鵬鷃之間出入是非之境
彼是
はなの夢此身をるすに置きけるか　嵐雪
りつき
彼の草にから名はなきか茗荷賣　百花
ものくさ
寒苦鳥明けなば紙子繕はん　舟竹
むひつ
書きそめや柄杓の底の十文字　衞門
たんき
おそ櫻禪のならひに切りくべん　琴風
うそつき
枯蓮のからかさかろし辻談義　笠凸
せはし
蜆くふ朝飯もはてぬ春の暮　幽亭
そさう
花の木やかならず走る下り坂　菊峯

きれいずき
硯墨蠅の喰ひものなかりけり　百里
いぶり
芋蟲は何にいぶりの名にはたつ　月下
ひがみ
十月や餘所へもゆかず人も來ず　尙白
みちべた
寺々の談義過ぎたかほとゝぎす　桐雨
よひまとひ
よひ〳〵は小坊主たゝく水鷄哉　當歌
あさね
雪かゝで御格子まゐれ四ッ日さし　山川
せち
蚤ひろふ手わざもにくし猿の智惠　青女
しんく
一升はからき海よりしゞみかな　其角
ぶきよう

相槌の笑うて明くるきぬた哉　山川

物名

槻卯木松橡桐椎桃梨
月うつきまつとちぎりし妹もなし　卜宅
賀茂鳥羽紀八瀨水野淀
鴨飛ばでたゞ巢に瘦し水のよど　立吟
蜑津岸瀨溝澪帆洲井筈波、
雨つきし蟬の身を干すいとまなみ　琴風
鵜鶴鸞鴇鶚鴛鳶鳴雁
うつるらん時日は惜しと鹿尾草刈　菊峯
敦盛
頬當にえくぼあるかな花軍　舟竹
潘安仁
盃に礫をとむる花柚かな　同
檜垣女
水かゞみ背中に雪をおひにけり　同
七福神

寄辨才天鑑
家子ともに引出物せん藏開き　琴風
寄惠比壽鯛
櫻鯛笑はゞたゞにくれつべし　同
寄大黑鼠
亭の顏のどかに黑し白ねずみ　同
寄壽老人鹿
角落ちて犬と見ましや庭の鹿　同
寄福祿壽杖
ふるひやうかの遍照が卯杖哉　同
寄布袋蝶
いざや蝶おもき身すらも舞の袖　同
寄毘沙門鉾
糸あそび甲の星が鉾のかげ　同
七小町
山本
あは雪は女のなやむけはひ哉

草紙洗

うき草や枯れて見しもの黒ながし　通

おもひある心おもげや雪の笠　同

卒都婆

霜けぶりそとばに寄るは苦しいか　同

關寺

七かへし小まちをかへせかぐら舞　同

鶏鵡

行くとしや肌にとまる梨の皺　同

清水

年籠り小町が若世尋ねけり　同

少將のつらき夜ごろをかぞへてとて、

まづかちよりかよひけん、あはれさよ

足の血や木瓜に裂けけん木幡越　山川

月の夜

さし足も月に目あらば恥かしや　同

闇

年の夜や細工わりなし槝の割　同

雨の夜

裝にたく香なとがめぞさくら寺　同

風の夜

こがらしもあはれとはふけ顔の胝　同

時雨

足すます帶刀もなし小夜しぐれ　同

雪の暮

つとめての雪の足跡君も見よ　同

廻文

松の木の雪やはや消ゆ軒の妻　卜宅

ながしつゝ浪しろしみなつゝじ哉　氷花

味酒に苦き物あり松と花　立志

山桝の芽を探ぐるおぼろげ　嵐雪

風通ふ氷室の外はあたゝかに　鋤立

床よりはこぶ猪のひとつ子　志

照る月は雪の柏木笹の霜　雪

檜篋ばかりうらおもてなき　立

逢はぬ戀練の袷の袖のゆき　志

黒いをとことわらはるゝいろ　雪

汐の日を風呂やの猿の名にたてそ　立

又乙雪とちぎるわかれ路　志

外に寝て尤めぬ犬をまたぎ越え　雪

かまのはらひの獅子鳴し來る　立

振舞に齋の急ぎのまがひけり　志

疊奇進もなくて秋ふる　雪

軒の葱天上したる龍のあと　立

夜はしづまる溫泉の底の月　志

なるときく向ふの後家の凉みゐて　雪

月戸の聲も我がおもひから　立

瘠瘵の藥窺ふ障子ごし　志

おこゝろしりの是の十人　雪

紺かきが染めそこなひし衣侘びて　立

足利殿の公事未細なり　志

長明とうき世噺さん山の奥　雪

松かぜの音地震又ゆる　立

闇きより心の底疑定の内　志

めばしの花のいづこみよし野　雪

春の月己は盗みはなるまいぞ　立

雁かへるまで妾番せよ　志

千束なる切紙かみも繼侘びぬ　雪

ひたものけふは眉ねかゆくて　立

よしなしの煙草をたてば何とやら　志

とりしまらざる氣は廿年頃　雪

そこ〳〵に代脉はあな頼みがた　立

見ても汗ごきあみ笠の跡　志

袖にして櫻たちばな沉麝香　雪

文ひろげいづ水無月の月　立白

笠うち越せば恨みの瀧を柳哉　舉白

大葉の茶摘小葉も候べく　嵐雪

くるへ蝶翅を己が聲にして　李下

ねり干す絹は風の一染　冰花

釣瓶井のくるか〳〵と月の秋　雪

人の刈るころ青き我が稻　白

蒲の穗のほくそもつかず有侘びて　花

狢ふるまふ心くるしき　下

年をしてうつたる舞はゆるさしめ　白

寄衆も勇者城もしれもの　雪

百谷の雪くづれ來る筑摩川　下

芽もたちあへず大割の材　花

花に來て牛もよだれを流す也　雪

その日に成りて悔ゆる入定　白

星に積む錢を飾にふるふとも　花

養ひ合せ人も知る緣　下

糸屑におもひを捨てよ組屋殿　白

月もきこゆる水戸の下町　雪

大魚の網引踊る舟競ひ　下

上にしたがふ荒すまふども　花

つり替に女はしづむ金秤　雪

情にとてはなめぬ石麻　白

胸を割りかしらをうつも酒の罪　花

狂言作る夜の蚊の責め　下

をとゝひも昨日も人の凉みにて　白

からかさかした君も問ひ來ず　雪

うきふしを又ゆりおこす渡し舟　下

日なたくさゝもふり醒す袖　花

石菖に油煙すべしのけふの月　雪

蟻蚱も羽ををさむ戸袋　白

秋風に眞弓とる手も肩を着て　花

三世のむすびに立つる接待　下

さからはで車も通せ腐れ橋　白

星霜照るか諸社の贈官　雪

花笠はかゞの番匠筑波萱　下

藤やまぶきの國風を讀む　花

瓜むきや男竪刻輪は女　立吟

雪のすゞめと扇もてなす　嵐雪

かうばしき硯明くれば筆取りて　同

あるじの心植木なき庭　吟

鎗韜其道みがく秋の月　同

年貢はからぬ己が除地　雪

藤原の十枝の裔もみぢして　同

頭數なる鎌倉の穢多　吟

仙臺の米つゞけくる恒の產　雪

近き雲居は禪の魂　吟

盜なりと鼠をいたく逆剝に　雪

仕合なほす暮の貧乏　吟

けはひ見て子持が母もさらす也　雪

未だ朝寒む御油の馬士　吟

さまぐのきぬぐかたれ軒の月　雪

露拾はする玄宗の馬鹿　吟

花にいつ貝摺錢をつなぐらん　雪

春面白き酒の呑みじに　吟

盜もかしらの家はかざりして　同

いづくの憎ぞ札くばり行く　雪

渡しさす舟守ともにうち返し　吟

すまふの意趣をとぐる一村　雪

小新發意勢は秋葉の二三尺　吟

橡ふるしぐれ竹笠を打つ　雪

鹽車月夜のよさに引侘びて　吟

市の座につく召の昆布賣　雪
懸聲も不肖々々の鼓うち　吟
翠簾を尻目の心しりきや　雪
蚰蜒は誰が黒髪をなめに行く　吟
明日の精進や戀のさまたげ　雪
はりあひもなき傾城の氣ぬけ哉　吟
賴義殿といひさうな顏　同
狐矢に荒木の弓を素引して　雪
七日々々の屍見にゆく　同
外科の子の手水仕習ふ花の水　吟
梅山吹の光るわきざし　雪

圈のうづらに目を耽らかす　嵐雪
鼠槍鼬矢削る藪の月　峯
田庵さびしき風の連枷　花
機嫌よく熊野のお寮入りおはせ　雪
帶の祝ひも明日の雜餉　凸
夏の夜を背き〳〵の寢ぞつらき　花
瓜きらひなる中のうつり香　峯
病みぬきてみれば涼しき草の上　凸
とはゞや所化の衣すます宿　雪
物盗む人の心の掛子ばこ　峰
客に扈從のみやびやかさは　花
新風呂を入り和げよ花の肌　雪
柳の窓を上ぐる尺はち　凸
桂男もうごくやうなる春の月　花
舟責下るかすりおもしろ　峯
捨石に胡座かく僧佛なり　凸
狐つかれの晝寢しに來る　雪

名によりて蚊遣になれよ伏見草　百花
あふぎのつまし塵取に折る　菊峯
切箔にちらせばかろき金にて　笠凸

ほれたとや白粉の花紅の花　峯
うき名の露よ番匠の妻　花
月はみん足に疵もつ餘所あるき　雪
稻喰ふ色はしるゝ木食　凸
蠶きてうつぶし染の捨衣　花
灸こらふる顏わらはばや　峯
さて戀りよ妬さ憎さの妍敵　凸
乞ふもなさけかお姫さま金　雪
旦那寺垣の後へにぬかづきて　花
鳥叫三度肝に入む聲　凸
芹の香に雪の兎の澤渡り　雪
機布ちゞむ越のうみ西　峯
水むしに妹が手の裏あれにけり　花
桃の葉しぼる湯肌うつくし　凸
花の種けふや祇園のお目さまし　峯
菖の鉾にほたる火をきる　雪

菊の香や瓶にも餘る水に迄　其角
蔦も便をかこふ小座しき　百里
幾重にも月さゝせんと向をみて　嵐雪
中酒にえめる雪の朝飯　角
覺えなく肌の癖れも冷渡り　里
拭ふ上さへ猶ぬぐひ板　雪
四幅對四つの常盤に詠めける　凸
小田の原なる宗雲の寺　角
漱ぐ透の頂香香にたき　里
下帶あらふ夏闌けにけり　雪
人きらぬ大小さます夕月夜　花
やり水淺く蓼紫蘇のとう　角
鯆とは是か鳴くらん生洲町　雪
餞うたふ戀の首尾あれ　花
女文字史の筆のふとりやう　凸
腸黑き弓とりの國　峯
裝束の百馬揃ふる花の山　雪
さかふる藤は門の客人　雪

感じては鬼が詩を次ぐ春の雨　角里
緣の返事はふつとならぬか　雪
座を打ちて母のたけりも我が泪　角
しばられて居るぬすびとの顏　里
大年や戸明くる音のあぢきなし　雪
鹽よと呼びて一舛の雪　里
うなゐ等がとさかを拾ふ磯遊び　角
冲の子の日に海松を引く　角
玉づくり難波は霞む古都　雪
蟻のちからも廻す輪藏　竹
老僧の若衆つれたる春の月　和
櫛買ふ店に袖ひかれたる　雪
船に醉ひ鞍に睡るを世のうつゝ　里
骨の供して御國迄行き　和
迂宮にあはぬ泪もかゝる哉　竹
芳野の暦月日わりなき　雪
餅花もやゝとすゝけてけふの春　角

羽箒にうつ雉子なく也　里

炭がしらけぶたき妹が泪かな　秀和
たゝみに雪の積る門立　舟竹
臘月の梅花は躾がず中々に　嵐雪
夜行の砂履にいそがし　和
しら〳〵と嬶娥や醉ひを盜むらん　竹
今朝も薄の手品してみる　雪
桔梗なるあふみの笠は形りがよし　和
親しらずとて旅に泣くめる　竹
人の垢よる〳〵かはる一夜妻　雪
目疣をさすれ君の鬢櫛　和
灌佛を手に提げて來る卯の花に　竹
蓬がもとのこゝろ朝起　雪
硯石窪しと人にみられては　和

髪の鶴を長生の德　三ヶ國我流にかなで治めけり
薯蕷麪すうる月夜雪の夜　花の歌醒が井餅に書黑め
けふぞ唐人天穿の晴れ　衣更着や肉陣風に立ちつらね
賭双六は宿にぞ打ッ　腰支を星に借す夜か後向き
このてかしはの人みしりして　形尾の鷸のとはへや水かゞみ
軾せばむさかづきのくれ　壹參伍も弓は流れたり
跡なる男先の小をとこ　いづ方へはかなく醫者の急ぐらん
羽串さす夜は雪の黑鬼　節季候の頭の草の生えるまで
膳ひかへ居て老いを嚙むかな

銀のはなし目貫を佩きながら　和
ならはしの歌を人の世の中　竹
猫好のこゝろ程身の有り安し　雪
水汲む時は數珠耳にかけ　和
神無月十三日を花盛り　雪
空冷じの冬の澁柿　竹

煤はきて何やらたらず家の內　寒陽堂
師走の門の子可賣子可買　月下嵐雪
冬籠る御厠人が隣り居て　桐雨
雪竿はかる旦夕の月　竹下
賞翫は鱈の雲腸打ちおかず　雪
杉のからさもうすき盃　和雨
本陣は結構あれど草枕　竹下
添髪削る匂ひ暑くれ　雪

帷子の首筋よれて胸あはず　雨
麥粉くふには言の葉もなし　下
おもしろう順禮うたふ芝の上　雪
曇りさだめぬ諏訪の湯煙り　雨
稲妻に人よびあるく神かくし　下
さゝらへ男うつゝ孕うだ　雪
落ちにきとうき名山田の鮎の魚　雨
何にあんにやの家にふれけん　下
花の床曉笑ひ畫ねぶり　雪
子かはゆがりの雉子もほろ〳〵　雨
鶯も譬喩品とこそ說きにけれ　下
佛頂顏よあられふる空　雪
塗垂の戸たてに行くか畠守　雨
我が一代を盡す書本　下
白川のそこらともなき住所　雪
黑谷よりは隣りなるらん　雨
松杉のくもりもはてず日てり雨　下
小うたで歸る五月早女房　雪
こいよ君待つぞよどのに薦しいて　雨
裾ぬひくるむ死跡の耻　下
十六夜の光りに寺の米無盡　雪
竹の子どしを秋風ぞふく　雨
城下の田町や霧に望むらん　下
浴歸りと見ゆる足輕　雪
葱に首つながるゝ龜かはん　雨
夢の錦は花の鶯どり　下
春の夜を媒氏の官に酌とらせ　雪
恨みうれしき衣更着の衣　雨

元祿三年庚午の夏

脫ぎかへがたき草の衣手　良品
有明の七ッ起きなる藥院に　殘
ひさごの札を付渡しけり　翁
秋風に槇の戸こぢる膝入れて　品
小僧のくせに口ごたへする　芳
やす〳〵と矢洲の河原の步渡り　翁
多賀の杓子もいつのことふる　殘
手枕の男も持たで三ッ輪組み　芳
人に取付く浮名口をし　品
萱草の色もかはらぬ戀をして　殘
秋たつ蟬の啼死にけり　翁
月暮れて石屋根まくる風の音　品
こぼれて靑き藍瓶の露　芳
朝顏の花の手際に咲初めて　翁
腹の鳴り來る水の替りめ　殘
猫の目の六ッ柿核に四ッ圓く　芳
あすのもよひの纖蘿蔔を切る　品

附錄

爰に附錄せる翁遺稿の卷々は、先のとし七部拾遺と題して、世に弘めたりしを、こたび新に家藏の七集を小刻合册し、ふたゝびこれに七部拾遺の名をかふむらせたれば、今此の卷々を捨つるにしのびず、卷の後に加へ侍るのみ。

菊舍主人識

種芋や花の盛りに賣りありく　翁
こたつふさげば風かはる也　半殘
酒好のかしらも結はず春暮れて　土芳

からうすも病人あればかさぬ也　殘翁
たゞさゝやいて出づる髪結ひ　品
とり〳〵に紺屋の形を取散らし　芳
冬至の宴に物おもひます　翁
けはへどもよそへども君顧りみず　殘
まだ元服もあどなかりける　芳
朝夕に嫌ひの多き膳廻り　品
いとあはれなる野々宮の衆　殘
田鼠のいねはみあらす月澄みて　翁
風ひえ初むる牛の子の旅　品
露しぐれ越の裂織袖もなし　芳
しなずば人の何に成るべき　翁
神風や吹起されてかい覺めぬ　殘
筆を落せば追而聞出す　芳
しら〳〵と一重の花に指しむかひ　品
長閑けき晝の太鼓打ちけり　涼葉
風流のまことを喘くやほとゝぎす　芭蕉
旅の草履に　の花の雪　青山
砂川にひたす及釜の傾きて　曾良
門違へする醫者の龜相さ　翁
月の夜は見しらぬ犬もしづか也　濁子
しろき西瓜も今は涼しき　嵐蘭
庫裏姥の手を束ねたる盆の中　岱水
ぬるみひとつと望む六尺　怒誰
三ッ目より人もしたしむ契りにて　嵐雪
心も有るか假名に名を聞く　葉
行燈をへだてゝ顔を隱し合ひ　蕉
木賃泊りは不馳走にする　山
入影も細き高野の朝の月　良
鹽を荷うて漸寒き人　子
蜱に隣りは臼を挽出し　曲水
小觸の文を送る村繼　誰
此の花に判官殿やとゞめけん　蘭

寺の榑木を流す雪水　子
入物も田螺に似せて竹笊　良
語るを聞けば乞食を君
長からぬ髭人參の賣所
又年くれて隱居くるしき
火桶すら寢ぬ夜の夢に消え殘る
蕎麥の粉ふるふ明日の振舞
返事せぬ手紙も掃いて捨てぬらん
おどけた顔は名のおぼえよき
落付に風呂云ひ付くる伊勢の御師
先づ日和よき秋の夕ぐれ
柿見世の富貴に見ゆる後の月
稻刈連れて小舟乘込む
狗の尾房さげたるをの童
碓井の岩に殘る足跡
曳渡す弓に中を望まれて
機嫌直しに酒もられけり　岱
やよやまて宿迄送る花の暮　葉
巣を喰ふ鳥の人に怖ぢざる　雪
夕顔や臺に場をとる夏座敷　山
西日をふせぐ藪の下刈　蕉
ちら〳〵と淺瀨に鮒のつれ立ちて　子
馬のまはりはみな手人也　蘭
一貫の錢で酒買ふ昏の月　雪
稗に穗蓼に庭の埒なき　葉
松茸も小僧もたねば守られず　岱
ほたゆる牛も人にからるゝ　良
臺所のつゞきに部屋の口明けて　蕉
旅の馳走に尿瓶さし出す　山
物ひとついうても念佛唱へられ　蘭
いまの間に何度時雨るゝ　葉

めき〳〵と川より寒き鳥の聲　星
米の味なき此里の稲　川
月影に馴染のふかき宿かりて　行
宵の奥なる初瀬の晩鐘　星
花の香に啼かぬ鳥の幾むれか　始
土ほりかへす芋種の穴　行
陽炎に田舍役者の荷の通り　筆
伊勢のはなしに料理先だつ
椿の木をすうすと風の鳴りわたり
尻もむすばぬ虚言ぞほぐるゝ
膳取を最後に眠る宵の月
きり〴〵す飛ぶさや糠の中
秋もはや園爐裏戀しく成りにけり
合點のゆかぬ雲の出て來る
脇道をかるふ請取るうき藏主
木に抱付いてのぞく谷底
仰山になり音たてゝ家根普請
日やけ畠も上白の出來
夏の夜も明けがた冴ゆる笹の露
笠かぶりて替とりに行く
隱家はみのゝ中でも高須也
此月末にをはる楞嚴
むかしから花に日が照り雨が降り
たらはぬ聲もまじる鶯

初茸やまだ日數經ぬ秋の色　芭蕉
青き薄に濁る谷川　岱水
野分より居村の替地定まりて　史邦
さし込む月に藍瓶の蓋　半落
鹽付けて餅喰ふ程の草枕　嵐蘭
なでゝこはばる革の引はだ　蕉水
年寄は土持ゆるす夕間暮

諏訪の落溫泉に洗ふ馬の背　邦
辨當の菜を只置く石の上　落
やさしき色に咲ける撫子　蘭
四ッ折の蒲團に君が丸く寢て　蕉
物聞くうちにつらき足音　月
月くれて雨の降止む星明り　邦
早稲の俵にほめく刈大豆　蘭
胸虫に亦起さるゝ秋の風　落
畚に赤子をゆする小坊主　水
花守の家と見えたる土手の下　邦
細き井關を登る若鮎　落
春風に太鼓聞ゆる旅芝居　蕉
のみ口ならす伊丹諸白　蘭
琉球に野良疊の表かへ　水
是非此際は上ん物やく　蕉
見知れて近付きなりし水曾の馬士　邦
娶入するより早鳴子引く　落
袖ぬらす染帷子の盆過ぎて　蕉
月も侘しき醬油の粕　蘭
草赤き百石取の門かまへ　水
公事に負けたる奈良の坊衆　落
傘をひろげもあへず俄雨　蕉
見る目も暑し牛の日覆　邦
出店へと又も隱居の出でられて　蘭
干物つきやる精進の朝　落
手拭のまぎれてそれを云募り　水
駄荷をかき込む板敷のうへ　邦
人續く毛利細川の花盛り　蕉
聲も賢なり雉子の勢ひ　蘭
久堅やこなれ〳〵と初雲雀　邦
旅なる友を誘ひ越す春　落
去來
芭蕉

借れば貸す櫻の庵掃置きて　其角
よしと口きる一瓶の酒　嵐雪
月晴れて灯火赤き海の上　蕉
峠の底に吹く秋の音　來
牛蠅に袷持せて羽織りける　雪
官位あたへて美女召供せり　角
提灯に大蠟燭の高煙り　來
出水に下る宮の材木　蕉
世渡りと關に道有る寺の背戸　角
つゝむに餘る腹氣押へし　雪
仇人の爲めにかく迄氏を捨て　蕉
何に付けたる歳暮の雪　來
哀れます昔語りの沓手鳥　雪
橘やせし竹の月影　角
冥加なう夜食すゝめにお腰元　來
毛氈をしき書畫の初まり　蕉
こぢ明くる庇の下に十萬家　角
日は何時ぞ醉ざめの月　雪
きり〴〵すいかで浮身の情なき　蕉
莖たくましき筒の鷄頭　來
いつとても南部の護摩の片燃に　雪
四ッの智惠には過ぎた家の子　角
鼻つまむ晝より先の生肴　來
あはつに負けぬ串の有樣　蕉
繩切つて柴木に咲ける花かつぐ　角
遊ぶ思案のわけて長閑けし　雪

城主君、日光御代參勤めさせ給ふに扈從す、岡田氏何某に寄す

篠の露袴にかけし茂り哉　芭蕉
牡丹の花を拜む廣場　千川
短夜も月はいそがぬ形ちして　涼葉
壁にたておく琵琶を轉ばす　左柳
雪よりは藁ふむ馬の冬籠り　川
出口とゞまる金山の砂　蕉
吹倒す杉も起さず此の社　柳
いつも茶のみによる端の家　葉
犬の子の惡まれぬほどよく肥えて　青山
稻する臼を借りにこそやれ　川
露深き曹洞宗の夕つとめ　蕉
瀨の闇きより登る月代　山
生きながら鮒は鱠に作られて　川
簀子出來かせば先づ疊敷く　柳
巡禮のかへりて旅の物がたり　蕉
兄より兄に傳ふ脇差　蕉
花見んと直る圓座に暖まり　山
狂へば梅にさはる前髪　葉
霰降る踏歌の宵を戀渡り　蕉
もり並べたる片器の蛤　筋
湯上りの浴衣干る間を待兼ねて　葉
窓のやぶれに入るゝ北風　柳
萩畠年貢の柴に刈初めて　川
酒やの門を叩く月の夜　葉
人足の貫目引合ふござ包　太舟
國を訪はれて笠をみせけり　葉
叢と日頃思ひし死所　波
降出す雨にさわぐ蟬の音　筋
隨心の笠に矢並を繕ひて　柳
火にかゞやきし門の金物　舟
院内に宇治川近き波の聲　葉
はなしとぎれて休む筆取　川
此の春はいつより早き花の蔭　蕉
蛙のせいかみゆる苗代　波

芭蕉翁全集 終

大正五年十月十五日印刷
大正五年十月十八日發行

俳諧叢書 第七册 芭蕉翁全集 奥付

編輯者 佐々醒雪
編輯者 巖谷小波

發行者 東京市日本橋區本町三丁目八番地 大橋新太郎
印刷者 東京市小石川區久堅町百〇八番地 高橋季吉
印刷所 東京市小石川區久堅町百〇八番地 博文館印刷所

發行所 東京市日本橋區本町三丁目 振替貯金口座東京二四〇番 博文館

定價一圓三十錢

不許複製

文學博士 佐々醒雪先生
巖谷小波先生 校訂

俳諧叢書

全七册

高村眞夫畫 伯意匠裝幀
菊判絹布天金綵頒美裝
正價每册壹圓卅錢
小包料—內地—十二錢

俳壇唯一の典籍

全部完成

◇◇俳諧叢書全書目◇◇

(1) 俳諧註釋集 上 七六一頁
(2) 俳諧註釋集 下 七七二頁
(3) 名家俳句集 附合集 八三四頁
(4) 俳論作法集 七二〇頁
(5) 名家俳文集 七一二頁
(6) 俳人逸話紀行集 六三三頁
(7) 芭蕉翁全集 六五〇頁

博文館發行

■ 俳席便覽 俳通 巖谷小波君編 正價壹圓五十錢 郵稅十錢

■ 增補俳諧例句 新撰歲事記 今井柏浦君編 正價金九十錢 郵稅八錢

■ ポケット 俳諧季寄せ 同 君編 正價金四十錢 郵稅四錢

■ 大正一萬句 同 君編 正價五十五錢 郵稅六錢

■ 最新二萬句 同 君編 正價金七十錢 郵稅八錢

■ 新撰一萬句 今井柏浦君編 正價五十五錢 郵稅八錢

■ 明治一萬句 同 君編 正價四十五錢 郵稅六錢

■ 古今女流俳句集 同 君編 特價金十八錢 郵稅四錢

■ 俳句作法 內藤鳴雪君著 正價三十五錢 郵稅六錢

■ 俳句資料解釋 峯青嵐君著 正價金三十錢 郵稅四錢

■ 聽雨窓俳話 角田竹冷君著 特價金六十錢 郵稅八錢

■ 百家俳句全集 春夏秋冬 星野麥人君編 全四册各四十五錢 郵稅各八錢

■ 俳諧類題句集 尾崎紅葉君編 全二册各二十八錢 郵稅各八錢

本邦國文の精華

校註 國文叢書

全部完部 十八冊

文學博士 本居豐穎先生
文學博士 井上頼圀先生
文學博士 萩野由之先生
文學博士 關根正直先生
池邊義象先生 校訂 註解

國文叢書全部書目

(1) 源氏物語 附 菫草 (上)
(2) 源氏物語 附 紫家七論 (下)
(3) 太平記 (上)
(4) 太平記 (下) 曾我物語
(5) 保元物語 平治物語 平家物語
(6) 竹取物語・落窪物語・佐日記・徒然草・紫式部日記・伊勢物語・枕草子
(7) 源平盛衰記 (上)
(8) 源平盛衰記 (下)
(9) 水鏡・大鏡・今鏡・增鏡
(10) 榮花物語
(11) 宇治拾遺物語・池の藻屑・松蔭日記
(12) 蜻蛉日記・更科日記・濱松中納言物語・とりかへばや物語・方丈記・月のゆくへ
(13) 宇津保物語 (上) 附 年立系譜
(14) 宇津保物語 (下)・狹衣物語・堤中納言物語
(15) 義經記・永久記・北條九代記
(16) 今昔物語 (上)
(17) 今昔物語 (下)・古今著聞集
(18) 神皇正統記・榊原松論・櫻雪記・吉野拾遺・十訓抄・大和物語・唐物語・和泉式部日記・十六夜日記

空押及模樣摺込天金緣 頗美本總クロース上製
自一卷至十二卷 正價一圓五十錢
自十三卷至十八卷 正價一圓三十錢
小包料內地各十二錢

藤島橋口兩畫伯意匠裝幀
菊判總布天金緣堅牢函入

博文館發行

文學博士 三島毅先生
文學博士 服部宇之吉先生
文學博士 高瀨武次郎先生 監修

文學士 久保天隨先生 校訂

校註 漢文叢書

全部完成 十二冊

敢むる所經典詩書諸子百家、其一般を網羅す。專攻諸大家の嚴正なる校訂を經、裝釘堅固加ふるに印刷の鮮明と定價の至廉とを以てして優に一頭地を拔きたるは言を俟たず江湖歡呼の裡に全部十二卷菊判壹萬壹千頁の大文庫を形成す、傑たる內容、麗たる裝幀、書齋に應接室に其在る所必ず光彩を放たむ、

菊判總クロース上製天金綾空押模樣摺込總紙數壹萬壹千餘頁
自一卷至四卷 一圓五十錢 自五卷至十二卷 一圓弗錢
小包料＝內地各十二錢

漢籍之精華眞髓

全部完成書目

(1) 論語 紙數 一一七四頁 (本冊に限) 郵稅十六錢
(2) 孟子 紙數 一二四〇頁 (本冊に限) 郵稅十六錢
(3) 大學・中庸・孝經 紙數 七〇八頁
(4) 唐詩選・三體詩 紙數 一二七八頁 (本冊に限) 郵稅十六錢
(5) 七書 上 孫子・吳子・司馬法・尉繚子 紙數 九八二頁
(6) 七書 下 三略・六韜・太宗問答 紙數 七四八頁
(7) 蒙求 紙數 八九六頁
(8) 詩經 紙數 七九四頁
(9) 小學 紙數 七〇〇頁
(10) 近思錄 紙數 一〇八五頁 (本冊に限) 郵稅十六錢
(11) 古文眞寶 前集 紙數 四七二頁
(12) 古文眞寶 後集 紙數 八六二頁

東京 博文館 本町

文学博士 幸田露伴先生
饗庭篁村先生
塚原澁柿先生 校訂

文藝叢書

全部完成 十二冊

藤島橋口兩畫伯裝幀
菊判總布天金絲上製
正價毎冊壹圓卅錢
小包料—内地—十二錢

(1) 忠臣藏文庫	紙九二〇頁數	篁村校訂	
(2) 椿說弓張月 後寛僧都島物語 報豪阿闍梨怪鼠傳	紙九〇六頁數	露伴校訂	
(3) 西鶴文集	紙八二四頁數	露伴校訂	
(4) 道中膝栗毛全集	紙八二五頁數	篁村校訂	
(5) 俠客全傳	紙九一四頁數	澁柿校訂	
(6) 南總里見八犬傳（前編）	紙九八八頁數	露伴校訂	
(7) 南總里見八犬傳（中編）	紙九七四頁數	露伴校訂	
(8) 南總里見八犬傳（後編）	紙九四八頁數	露伴校訂	
(9) 演劇脚本集	紙七二三頁數	篁村校訂	
(10) 忠義復讐傳	紙七四二頁數	澁柿校訂	
(11) 紀行文編	紙七二七頁數	露伴校訂	
(12) 世話淨瑠璃名作集	紙七三四頁數	篁村校訂	

近古文藝の精英

東京本町 博文館發行

近代泰西名家著作
現代日本諸大家譯

近代西洋文藝叢書

全部完成 十二冊

中村橋口兩畫伯意匠裝幀
菊判總布天金絲堅牢函入
正價毎冊金壹圓卅錢
小包料—内地—十二錢

文學は人生の表現である人生を見る事が出來るけれども今日の如く一般の生活が世界的になつて彼と此との活動が一々互に相響應する時代に在つては吾々は單に唯生活の源泉たる祖先なの生活に求めるだけでは滿足が出來ない廣くこれを世界各國民の生活を見て以て「我」の生活に培ひ溌ぐの用意と覺悟がなくてはならぬ而して眞によく吾々の生活と其脈搏を同うし直ちに共鳴を感ずる所の文學はとはいへ即ち西洋近代の名篇佳作を移植せんとするは實に此の意に副はんとするの徴外ならぬのである譯者は悉く是れ現代生活を味到せる現代文壇の俊秀等の本叢書の完成に依つて徒らに名のみ傳へられ其實の味ひ知れなかつた西洋近代文學は始めて吾々日本人の面前に展開して吾々日本人の生活を豐富にし且つ深遠にすることを信じて疑はない。

泰西文華の逸品

1	クウプリン作 昇曙夢君譯 決鬪 附生活の河	五七八頁
2	フロオベエル作 生田長江君譯 サラムボオ	五四三頁
3	シユニツツラア作 植山正雄君譯 廣野の道	六〇〇頁
4	モーパツサン作 中村星湖君譯 死の如く強し	四八八頁
5	フルグーネフ作 相馬御風君譯 處女地	五〇〇頁
6	ドストエフスキー作 片山伸君譯 死人の家	六二五頁
7	ダンヌンチオ作 森田草平君譯 快樂兒	五三五頁
8	ズーデルマン作 小宮豐隆君譯 罪（カツツエン シユテーヒ）	五五〇頁
9	トルストイ作 阿部次郎君譯 泥濘・結婚の幸福	五六〇頁
10	ゴーリキー作 鈴木三重吉君譯 懺悔	五〇四頁
11	ピエルロチ作 吉江孤雁君譯 氷島の漁夫 附埃及行	四七〇頁
12	ゴンクウル作 前田晁君譯 陷穽	四八〇頁

博文館發行

K 27

文學博士 佐佐木信綱先生
文學博士 芳賀矢一先生 校訂 註解

校註 和歌叢書

全七册

中村不折畫田意匠裝幀
菊判總布天金緑頭美裝
正價每册壹圓卅錢
小包料—内地—十二錢

◇◇和歌叢書全書目◇◇

全部完成

(1) 萬葉集略解上 七八〇頁
(2) 萬葉集略解下 七〇二頁
(3) 八代集上 八四六頁
(4) 八代集下 七二二頁
(5) 三十六人集 七二二頁
(6) 近代名家歌選 六三四頁
(7) 和歌作法集 六九〇頁

博文館發行

本邦歌壇の珍襲

文學博士 芳賀矢一先生
文學博士 佐佐木信綱先生 校訂

校註 謡曲叢書

全三册

高村眞夫畫田意匠裝幀
菊判總布天金緑頭美裝
正價每册壹圓卅錢
小包料—内地—十二錢

全部完成

■ 第壹卷 八二四頁
■ 第貳卷 七五二頁
■ 第參卷 六八〇頁

謡曲は武家時代を代表する國樂にして、後世淨曲の淵源を成せるもの、上は中古の文學に基き、下は近世の詞藻を開けり、優雅にして穩健。宜なるかな、今日に於て盛に家庭の間に謳誦せらるゝなり。本書に收めたるものは觀世流の内外二百番を根柢とし、眞享元祿版の番外二百其他各流にわたりての出入を補へるを以て、總計五百餘十番に達す。上卷には和漢朗詠集をはじめ宴曲諸集を彙集して、謡曲の全觀を得せしめんとす。いづれも新に標註を施したれば江湖初學の善本なりとす。

345
4

終